

京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科
2012年度 フィールドワーク・インターンシッププログラム

報告者氏名 片桐 昂史

2011年度 (入学)

1.研究課題：

西アフリカ・セネガルにおける環境変動とマングローブ植生

2.派遣期間：

平成 2012年 8月 16日 ~2012年 11月 15日 (91日間)

3.今回の派遣により、申請時に自身の目的としてあげた点について得られた知見を述べてください

本調査では、外洋、小川（ボロン）、サルーム川の異なる3つの潮間帯においてそれぞれ100mライントランセクト調査を実施した。10mおきに土壌をサンプリングし、植生を記録した。測量を元に地形と植生断面図を作成した。潮間帯における比高と土壌組成の変化および潮汐と高い蒸散による tannes と呼ばれる塩類集積がマングローブの分布を制限していることが明らかになった。その他に、潮間帯に外洋とサルーム川において、*Conocarpus erectus* の枯死が観察された。外洋では海岸の丘が内陸に移動し、*C.erectus* に覆い被さることによる枯死のようである。サルーム川では、潮汐と波による土壌の流失が *C.erectus* の枯死の原因と思われる。小川では、水際に分布する *Avicennia germinans* に家畜による食害が認められた。今後、サンプリングした土壌の分析を進め、潮間帯の土壌中における塩類集積のメカニズムの詳細を明らかにしたい。

4. 自身の今後の海外への渡航や留学に向けた課題や展望について

本調査では、植生や土壌など主に自然の調査に重点をおいた。ウォルフ語も上達し、調査助手とのやりとりもスムーズに行えた。順調に調査は進んだ。一方、植生調査の最中にセレールの人びとによるカキや貝の採集、投網、塩田における塩採集、薪の切り出し、家畜の放牧が散見された。環境変動だけでなく、セレールの人びとの多岐にわたる環境利用もまたマングローブの分布と生育に大きな影響を与えているはずである。今後、環境利用と植生の関係を明らかにしていきたいと考えている。また、調査に行く道すがら出合った人びとの会話のなかに植物や潮の変化への言及があった。環境利用の調査を進める上でも、セレールの人びとの植物や自然に関する認識を知ることは重要である。よって、さらなるセレール語の習得が欠かせない。

5. 本プログラムに関して意見をお聞かせください。また、今後どのような留学プログラムがあれば参加したいですか？

私の調査地であるセネガル共和国は、派遣対象国とはなっていなかったが、柔軟に対応して頂き感謝している。私の調査地は、観光産業が発達しておりフランス人の経営するキャンプマンも多数ある。とくに外国人に対する金銭感覚が少々高めに見積もられている。そのため、交渉した滞在費や調査助手への給料も少々高くついた。航空券が約20万円であることを考えると、3ヶ月の調査で調査費4万円では、不足である。可能であれば、もう少し拡充して頂けるととても有り難い。また、セネガル共和国の共通語であるウォロフ語や調査地で話されるセレール語を体系的に学ぶことができる言語プログラム等があれば、ぜひ参加したい。